2023年度
マツダ財団寄付講義
（単位互換科目）

広島文教大学
「地域と社会」
報告書

公益財団法人マツダ財団

※以下、講師の敬称略とさせていただきます

目 次

1. 寄付講義開設の経緯 3
1.1 マツダ財団の寄付講義について 3
1.2 開講の経緯 3
1.3 本講義の目標と特色 4
2. 講義の概要 4
2.1 集中講義 4
2.2 ボランティア実習 4
2.3 レポート課題 5
2.4 評価方法 5
2.5 単位 5
2.6 単位認定 5
3. 集中講義の内容 5
3.1 イントロダクション 広島文教大学 副学長 植田 智、マツダ財団 井上 紀文 5
3.2 ボランティア概論 ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長 竹内 瞳 6
3.3 チームワークについて NPO 法人 IMAGINUS 笠井 礼志 7
3.4 少年期の心理 比治山大学 現代文化学部 講師 木谷 智子 8
3.5 企業の社会貢献活動 マツダ ㈱ 総務部地域リレーション Gr. 主任 吉塚 瞳 9
3.6 ボランティアの実際（自然とのふれあい） NPO 法人 ほしはら山のがっこう 副理事長 浦田 愛 10
3.7 ボランティアの実際（子ども食堂） ふかわ子ども食堂 代表 渡邊 恭子 11
3.8 ボランティアを考える NPO 法人 これからの学びネットワーク 代表理事 河野 宏樹 11
4. 受講生のレポート課題から 12
①「ボランティア活動で得た発見や学びは自分自身を成長させる糧」 13
②「人と人とが繋がることの良さは、その繋がりから生まれる化学反応」 13
③「ボランティア活動だからこそできることを精一杯やろう」 14
④「よく見る、よく聞く、先入感を払拭することの大切さ」 15
５．参考 16
（参考１）理解度・内容について 16
（参考 2）ボランティア実習先、実習内容について 17
さいごに 17

1. 寄付講義開設の経緯

1.1 マツダ財団の寄付講義について

マツダ財団の寄付講義は、1995 年に開始しました。社会人として必要な視点・能力の醸成に寄与すべく、実際の社会の仕組みを理解するとともに、現在の日本の課題、世界の課題を社会科学的視点によりとらえ、これから必要とされる「柔らかい社会（社会の不足部分を人と人との支えあいで補う）」での生活者、社会人としての役割やビジョンについて、次世代を担う学生と共に考える「双方向」の講義を目指しています。

1.2 開講の経緯

マツダ財団では、1998 年より、当時の(財)広島市ひと・まちネットワーク（現、（公財）広島市文化財団）と共催で、「感動塾・みちくさ」を開催しています。これは、小学生に創意工夫させ、感動を体験してもらう合宿事業で、このような事業の実施には、プログラムの円滑な推進と子どもたちの活動を手助けするためのボランティアによる支援が欠かせません。加えて、特に大学生などの若い世代において、社会の仕組みを理解し、柔らかい社会を担っていけるような人材を育成したいとの強い思いもあり、本講義「ボランティア活動」が生まれました。

そして、2000年度から「単位互換科目」として広く県内の大学生に受講していただく運びとなりました。その後も、（一社）教育ネットワーク中国のお力添えを賜り、2年ごとに開講大学を替えながら、現在まで下表のように継続しています。

年度	開講大学	講義名		開講日	単位取得者数
2000-01	広島修道大学	人間科学特論演習 (ボランティア活動)	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2000.5.13&5.20、夏休み実習	13
				2001.5.12&5.19、夏休み実習	19
2002-03	広島国際学院大学	国際協力 (ボランティア活動)	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2002.5.18&5.25、夏休み実習	23
				2003.5.17&5.24、夏休み実習	32
2004-05	比治山大学	世界と共に生きる (ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動を通して)	単位互換科目 高大連携 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2004.5.15&5.22、夏休み実習	27
				2005.5.14&5.21、夏休み実習	9
2006-07	エリザベト音楽大学	人間学Ⅵ-1 (ボランティア活動)	単位互換科目 高大連携 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2006.5.13&5.27、夏休み実習	9
				2007.5.26&6.2、夏休み実習	36
2008-09	広島文教女子大学	国際協力論 (ボランティア活動)	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2008.5.24&5.31、夏休み実習	11
				2009.5.23&5.30、夏休み実習	11
2010-11	県立広島大学	35 ボランティア活動	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2010.5.22&5.29、夏休み実習	20
				2011.5.21&5.28、夏休み実習	30
2012-13	広島女学院大学	特別講義Ⅰa 「ボランティア活動論」/ 「ボランティア論Ⅰ」	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2012.5.19&5.26、夏休み実習	3
				2013.5.18&6.1、夏休み実習	30
2014-15	安田女子大学	現代社会と人間 B （ボランティア活動）	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2014.5.24＆31、夏休み実習	7
				2015.5.23＆30、夏休み実習	14
2016-17	広島修道大学	キャリア形成特殊講義 （ボランティア活動）	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2016.5.21＆28、夏休み実習	19
				2017.5.20＆27、夏休み実習	20
2018-19	広島女学院大学	「ライフキャリア特別講義Ⅰa」 「ボランティア活動」	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2018.5.19&26、夏休み実習	36
				2019.5.18＆25、夏休み実習	38
2020-22	広島市立大学	「地域ボランティア活動」	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2020 年度はコロナで中止	-
				2021.5.22&29 ｵﾝﾗｲﾝ授業　実習	11
				2022.5.21&28、　実習	17
2023-	**広島文教大学**	**「地域と社会」**	**単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習**	2023.5.27＆6.3、　実習	14
				単位取得者数累計	**449**

1.3 本講義の目標と特色

本講義は、集中講義とボランティア実習を組み合わせた構成としています。まず、集中講義でボランティア活動に必要な基本的知識や方法を学び、その後、実際にボランティア活動を実践することで、活きた知識・方法を身に着け、自ら感動を体験してもらいたいと考えています。

【受講目標】

- ボランティアの基本的な理念を理解する
- ボランティア活動を行う上で必要な態度とルールを理解する
- 対人コミュニケーションを図る（相手の話・気持ちを聞き、自分の気持ちを伝える方法を学ぶ）
- ボランティア活動を実際に体験する
- ボランティア活動を通じて自らの生き方を見つめ直す（これからの生き方を考える）
- 報告書の書き方、報告の仕方を学ぶ。

【特色】

- 多様な外部講師陣のリレーによる講義
- 子どもたちと接するボランティアの実習
- 自力での実習先探索、交渉、参加

2. 講義の概要

2.1 集中講義

日時　：　2023年5月27日(土)、6月3日(土)、9：10～16：20　（4コマ×2日間）

場所　：　広島文教大学

講義構成と講師陣　：

（敬称略）

内　容		講　師
1．イントロダクション	2023 5.27	広島文教大学 副学長 植田智、 マツダ財団 常務理事 井上紀文
2．ボランティア概論		ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長 竹内瞳
3．チームワークについて		NPO 法人 IMAGINUS 笠井 礼志
4．少年期の心理		比治山大学現代文化学部 講師 木谷智子
5．企業の社会貢献活動	2023. 6.3	マツダ ㈱ 総務部地域リレーション Gr. 主任 吉塚瞳
6．ボランティアの実際		NPO 法人 ほしはら山のがっこう 副理事長 浦田愛
7．ボランティアの実際		ふかわ子ども食堂 代表 渡邊恭子
8．ボランティアを考える		NPO 法人これからの学びネットワーク 代表理事 河野宏樹

2.2 ボランティア実習

各自でボランティア実習先を探し、夏休みなどを利用して実施

実習の条件

- 期間は 6/4～8/31 の間。
- 実働 30 時間以上、あるいは 2 泊 3 日以上であること。
- 小・中学生とのふれあいのあるボランティア活動。

2.3 レポート課題

「集中講義」と、その後に行った実際の「ボランティア活動」経験より、あなたが得たこと感じたこと、またこれらを踏まえて、「これからの生き方」についてあなたの思いを記述下さい。

事前に実習先連絡票を提出した上で、2023 年 8 月 31 日までに、レポート（履修報告書）、アンケートと、ボランティア参加「証明書」を提出。

2.4 評価方法

「講義の出席」、「ボランティア活動への参画」、「レポート」 の 3 点により下記の基準で評価。

- 本講義は、ボランティア実践活動による履修学生の精神的な「気づき」を大切にしたいと考える。従って、評価点の配分を集中講義４０点、ボランティア活動６０点と定める。
- 集中講義に１日も出席しない、あるいは、ボランティア活動の実践を行わない場合は、いずれも単位は認定しない。
- 集中講義２日を、それぞれ２０点（１コマ５点）とする。
- 実践活動は証明書のあるものだけを単位認定対象とする。
- 基本的に絶対評価で行う。但し、実施レポートの内容は相対的な評価も加味する。

2.5 単位

2 単位

2.6 単位認定

広島文教大学　履修登録 25 名、 内集中講義受講 17 名、 内 14 名が単位取得

3. 集中講義の内容

3.1 イントロダクション　　マツダ財団　井上　紀文

初めに、広島文教大学副学長である植田智教授より開講のご挨拶を頂いたのち、マツダ財団が「イントロダクション」を行った。出欠確認の後、グループワークができるように教室のレイアウト変更を行った（4 人 1 島 3 グループ）。

イントロダクションでは、最初にアイスブレイクとしてグループ内で自己紹介を行った。一人 1 分で、学部、学年、名前、今年になって一番嬉しかったことなどについて紹介してもらった。

アイスブレイクが終わったところで、本講義の成り立ち、目的や達成目標を述べた上で、２日間の集中講義と実習、単位認定までの日程と提出資料について説明した。

続いて、当講義の提供者であるマツダ財団について、科学技術の振興と青少年の健全育成を２本柱として行っている事業内容について紹介したほか、公益財団法人の概要や現状についても紹介した。

そして、ボランティア実習に備え、過去の受講者の実習先等を紹介し、ボランティアに対するイメージを持ってもらうよう努めた。

実習時に事故や体調不良が発生した場合は、大学事務とマツダ財団に連絡するように念押しを行った。

【受講生の感想】

＊ 財団について知る機会が今までなかったため、今回詳しく知ることができてよかったです。財団がそれぞれの目的に応じて作られ活動していることが分かりました。ボランティア活動等の社会貢献に私自身も積極的に参加したいと考えています。特に子どもと関わる活動を行いたいです。

＊ この講義の目的やボランティアの種類などについてとても勉強になった。この講義を受けて、ボランティアや社会活動についてもっとしっかり知りたいと思ったし、自分もその一員として何ができるか考え、実行していきたいと思った。

＊ マツダ財団が様々なボランティア事業に取り組まれていることが分かった。ボランティアは参加しづらいものと思っていたが、ニーズがあるため喜んでもらえることを知ったので積極的に参加してみたいと思った。

＊ マツダ財団さんが様々な事業に取り組んでいらっしゃることが分かった。色々な著名人から話が聞ける講演会も行っているということで、自分含め今の若者には大人からの話を真剣に聞くという場が少ないと思うのできっかけがあることは話を聞ける大きな一歩だと思った。また著名人から聞けるということで興味を引きやすいのだと思った。

＊ マツダ財団で行っているボランティア活動や助成活動についてとそのような活動を行うことにした経緯についての話をうけた。財団という名前から金銭的援助をしているという勝手なイメージを持っていたが、若者や子どものため、科学・社会のための活動も行っていることを知った。その他の財団も多様な活動をしていると知り、自分自身がボランティアをするにあたって様々な社会貢献の仕方があると分かり、自分に合った社会貢献の方法を見つけて参加していこうと思った。

3.2 ボランティア概論　　ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長 竹内 瞳

広島で活動する市民活動団体の情報の交換や発信をする「市民活動のたまり場」として、環境・平和・国際交流・文化・地域づくり・ボランティア活動など、分野を超えたネットワークづくりを目指す、ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長の竹内瞳さんに講義いただいた。

まず初めに、他己紹介を行い、相手の事を周囲の人に知ってもらうためには、お互いの情報を共有する際に、より良く聴き相手を理解する事、そして受け入れてもらうためにはどのように話せば良いかを体感した。更に、聞かれて答える事を繰り返すうちに、自分自身について新発見をする学生もいたようだ。

次に、そもそもボランティアとは何かを知るために、日本の活動の変遷や事例、基本原則である「自発性」「無償性」「先駆性」「公共性」の説明に続き NPO 活動の必要性について企業や行政との違いから説かれた。

続いて、ボランティア実習を控えている学生達に、ボランティア活動の探し方について「自分の関心」や「できること・得意なこと」など 4 つのポイントを紹介された。学生達は、自分ごととして真剣に聴いていたようだ。

最後に、これから頑張る皆さんへ贈る言葉として、ボランティアを行うのは責任感を持って行うこと、自分本位でなく当事者がいるので、何のために行っているのかに立ち返りながら取り組むこと、対話を繰り返し理解し受容し、寄り添い支え合うことが大事であること、そして、「人のため、社会のため」と思って取り組みを重ねているうちに、実は自分のためになっているということも説かれた。

【受講生の感想】

＊　そもそもボランティアとは何か、どんなふうに始まったのかとても勉強になった。大学の外で自発的に行う活動だからこそ、自由でやりがいもあるだろうし、自分の経験としても良いものになると思った。しかしその分きちんと責任をもって自分自身を見つめながら活動していくべきだと思う。

＊　視野を自分から地域、世界へと広げていくことで、ボランティア・誰かの力を必要としている人が多く存在していることが分かった。ボランティアは状況にもよると思うが、楽しんでやることが大事だと思うので、実際にボランティアに参加するときは楽しんでやっていきたい。

＊　ボランティアとは何かについて、基本原則に基づいて話を受けた。話の中にもあったが、基本原則はあくまで定義であり、これらすべて視野に入れて活動を行っているわけではないと知った。要は、利益のための自発性ではなく、貢献のための自発性であればボランティアであるのではないかと個人的には思った。また、ボランティアと聞くと災害支援のイメージが強いが、その他多様な支援目的のボランティア活動があると知った。また、自分の活動後の達成感や楽しむということも活動を行う上で重要であるとも知った。

3.3 チームワークについて　　NPO 法人 IMAGINUS 笠井 礼志

国を問わず若い世代が、異なる環境に生きる人を想像し、新たな共生の道を創造する『学びの場』を提供している IMAGINUS の災害支援活動の他、高校生が夢を叶えたり社会課題解決したりするための支援や塾の講師など多彩に活躍されている笠井礼志さんに講義して頂いた。

まず初めに、学生たちは他己紹介を行った後、本題に入る前にアイスブレイクとして、接続詞や副詞など、文と文のつなぎとなる言葉が書かれているカードを使ってチーム員全員で物語を作り、チームで何かをやる面白さを体感した。

それらの経験をもとに、講義の前半では「チームとは何か」をチームに分かれて意見交換した後、講師からチームとは、「共通の目標を持ってそれの達成に向け、協力して行動している組織」であることに加え「自分の幸せ追及とチームの目標が重なっている点が大事」であること、また、「個人の好きなことや得意なことを組みあわせ最大化する装置」であること等の説明を受けた。

講義の後半では、「どうすればより良いチームを作ることができるか（どのようにしてメンバーが同じ目標に向かって行動できるようになるか）」を理解するため、各グループ A4 コピー用紙 30 枚だけを使って、できるだけ高いペーパータワーづくりに取り組んだ。作戦タイム 1 分の後、タワーづくりを 6 分で行った。色々な形のタワーができたのは面白かった。他のチームのタワーを見て 1 分間の振り返りを行った。そして 2 回目にチャレンジ。声掛けが活発になり 1 回目よりかなり高いタワーができたチームが現れるなど、お互いが役割を認識し、切磋琢磨する姿が印象的だった。

まとめとして、より良いチーム形成を行うには「共有ビジョンを持つこと」「心理的安全性の確保（失敗を許容しながら目標に向かって考え行動できる環境が確保されていること）」に加えて、「その人の個性を生かす」ことにより高い成果が出せることなど、3 つのポイントについて説かれた。

【受講生の感想】

＊　チームとは一人一人の特性を活かし、共有、協力して目的を一緒に達成することができる、かけがえのない存在だと思えました。チームをより良い状態にするために、自分にできることは、相手を理解し、思いやる心、周りの状況を見て判断し、行動することを心がけていきたいです。

＊　チームについて学んだ中で、自分は「声」が必要だなと感じました。何か自分の思い考えを伝え、声に出すことが、チームの議論につながり、その声の多さがチーム内の雰囲気につながっているのではないかと思います。ペーパータワーの際も１度目は皆の発言数が少なかったために失敗しましたが、２度目は主体的に発言できていたと思います。

＊　チームワークについて学ぶことができました。チームで連携することで、１人でやるときよりも、より良い成果を発揮することができることがよく分かった。人との関わりの中で自分を出していいと思える心理的安全性が生まれると、それぞれの意見を出し合うことが可能になると学んだ。

＊　チームとは同じ目的意識を持った人々がその人の個性を活かしながらより良いものを作り上げていくものだと私は考えた。チームという集団は価値観やモチベーションの違い、一人の行動が全体に大きく影響を与えてしまうなど難しい点もあるが、それよりももっと多くのことを得られる集団なのだと改めて感じることができた。

＊　グループワークを通して、チームワークで一つの目標を達成するための重要な項目を学んだ。目標を達成するために同じ作業をするのではなく、自分の得意な作業をすることで役割分担が自然と出来、失敗した時に原因をすぐ考える方向に切り替える余裕が生まれたためリカバリーをすることができたと思った。個性で自分のできることを各自が行い、失敗時と計画を立てる際は、意見を言い合うことで良い結果を生み出せたと思う。

3.4　少年期の心理　　比治山大学 現代文化学部 講師　木谷　智子

青年期のアイデンティティ形成研究をされ、中学生～大学生までの学生相談やスクールカウンセリングに携わっておられる比治山大学の木谷智子先生に講義いただいた。

始めに、「人と関係を築くためには『相手の気持ちを考え理解して』関わることが大事と言われるが、どの程度まで理解できるものだろう？」との投げかけがあった。それを考える一つの方法として「人によって色の違ったドレス」の画像を見て、光の影響や自身の経験によって同じものを見ても同じように見えていないことを知り、「人の気持ちを理解するとは、相手の世界の見方を理解するということ」であるという点を学んだ。特に子どもは認知機能の発達段階にあり、自分中心的な見方から徐々に客観的な見方ができるようになることを理解した。

その後、FELOR モデルと傾聴技法を学び、ペアワークを何度か体験した。相手の話を聞かない姿勢（顔をそむける、目を見ない、腕を組む）と話を聞く姿勢（顔を向ける、目を見る、手は膝の上）の両方を話し手、聞き手として体験し、話す側、聞く側双方の感じ方を話し合った。また、うなずき、相槌、反復技法など、当たり前のことがいかに有効であるかを体験した。

*FELOR モデルとは、

Face：顔を相手に向けて話を聞く
Eye-contact：相手の目線を優しく見守る
Lean：身体を相手の方に傾ける
Open：閉ざされた姿勢ではなく、開かれた姿勢で
Relax：落ち着いてリラックスした気持ちで

【受講生の感想】

＊　自分の見ている、感じていることは、相手と全く同じというわけでは決してないということ。だから、相手の立

場やあらゆる場面で思い合えると良い人間関係が築けるということを学びました。目を見て、身体を向けて、話を聞きましょう！と口酸っぱく言われた小学生時代を思い返して、必要なことだったなと気付けた。

＊ FELOR モデルは、子ども相手でも大人相手でも通用することだと感じた。私は、初対面や仲良くない人ほど、FELOR モデルとは逆の態度を取っていると気付き、変えていく必要があると思った。話す相手話してくれる相手に対して、聞く姿勢を見せることが大切だと思った。相手の話を掘り下げるときにも、時と場合によって開かれた質問と閉ざされた質問を使い分ける必要があると思った。

＊ FELOR モデルや、傾聴技法など、今後ボランティアに行く際も、これからの日常生活でも役に立つスキルを学ぶことができました。また、子どもと目を合わす時に、しゃがんで目を合わせて話すと良いなどのアドバイスも聞けて為になりました。子どもたちの言語化を手助け出来たら嬉しいなと思いました。

＊ 自分が見ているものと相手が見ているものに違いがあったり、発達段階で子どもの考え方、伝え方に差があったりときちんと自分と相手は同じものを見ても違う捉え方をすると理解していかなければならないと分かった。円滑にコミュニケーションをとるためにも、相手のことを思いやった聞き方を常に心がけていきたいと思う。

＊ 話し手・聞き手になるにあたって相手のことを思いやるということが大事だということを改めて知った。相手の立場になり話したり聞いたりしなければ相手を不愉快にさせると思うので相手の考えを尊重することが大事だと思った。自分だけの考えで物事を考えず、違う意見も存在すると常日頃思っておくことが大事だと思った。

3.5 企業 の社会貢献活動　　マツダ ㈱ 総務部地域リレーション Gr. 主任 吉塚 瞳

マツダ㈱総務部地域リレーション Gr.でマツダグループ全体の社会貢献活動のとりまとめと地域貢献活動を行っている吉塚さんに、企業と社会の関わりについて説明をいただいた。

最初にマツダ㈱の概要を簡単に紹介した後、VUCA の時代と言われる中で、企業が社会課題解決に向けどのような取り組みを行っているか、マツダを例にとって紹介された。続いて、地域とマツダの関係について、マツダの歴史とともにその変遷が紹介された後、現在取り組まれている 3 つの柱「環境・安全」「人材育成」「地域貢献」に沿って具体的事例の紹介がなされた。特に、夏に小学生を対象としたボランティア活動を控えている学生の参考になるよう、人材育成で取り組まれている学習支援活動について、考え方や取り組み事例が紹介された。

グループワークでは、「企業が行う社会貢献」について思い浮かぶ企業名と活動について話し合った他、認知度を上げるための方法につてグループディスカッションを行った。学生は講義やグループワークを通して身近な企業がなぜ社会貢献活動を行っているのか理解を深める機会となったようだ。

【受講生の感想】

＊ マツダさんだけでなく、今思い返すといろいろな企業の方が社会・地域貢献をしているのだと知りました。子どもにも、小さい頃からモノづくり体験させることで、モノづくりの大切さ、地元への関心を持てるようにするのは大事な経験だと思いました。

＊ マツダの企業による社会貢献活動が、環境や教育など、様々な分野で行われていることが分かった。県外出身のためあまりピンとこないが、カープやサンフレなど、地元のチームを絡めた認知活動だと、広島県民には馴染み深いものになるかもと思った。広告等で知ってもらうよりも、自分が実際に活動したり、活動を見たりすることで浸透するのかなと思った。

＊　マツダの企業が子どもの教育のためにどのような活動を行っているのか知った。学校内で行われているいわゆる義務教育を飛び越えて、地域や社会のためにどう貢献しているというようなことを知って驚いたということが正直な感想である。授業内でもあったようにあまり知られていないからこそ、どう認知してもらうかが今後の課題であると思った。

3.6 ボランティアの実際（自然とのふれあい）　NPO 法人　ほしはら山のがっこう　副理事長　浦田　愛

三次市の廃校になった小学校を一部改装した体験交流宿泊施設で、人と人とのふれあいの場を大切にしながら、総合的な「生きる力」につながる「自然体験・ふるさと体験」による遊びと学びの機会・場を提供しているほしはら山のがっこうの副理事長・事務局長・ふるさと自然体験塾長の浦田愛さんに講義をして頂いた。

最初に田舎にないものと田舎だからあるものを対比させ、「ないものねだり」から「あるものさがし」という考えを披露された。

続いて、ご自身がどのような経緯で今の活動を行うようになったのか、廃校を取り壊さないためにどうしたのか、現在、ほしはら山の学校ではどのようなことをしているのか、臨場感あふれた具体的な取り組みの紹介があった。

講師からのメッセージとして「ふるさとを未来につなぐために」は、どこにいても幸せに生き続けられるにはどうしたらいいか、景色、文化、暮らしを見つめそこの社会課題も一緒に見つけるとよいこと、また、自分にできること、地域にできることを考え、地域の人たちと一緒に活動することで相乗効果が生まれることなどを説かれた。学生の中には、地元の社会課題と照らし合わせ、自分ができることに思いをはせるなど、学生たちの心に響いたようだ。

【受講生の感想】

＊　はじめは学校の校舎を残すために始めた活動が今ではすごく大規模な物になったり、様々な人と少しずつつながりが広がっているという事を知って感動した。また、地域の魅力を再発見したりしている所もとても良い活動だなと感じた。

＊　自分の高校も庄原の西城という山奥にあり、他人事とは思えない話でした。自分たちは西城を活性化させるために、リモートで他の地域との交流をしたりしました。このように若い力を使った活動というのは過疎化が進んでいる地域では重要なのではないかと思います。ボランティアによって地域の活性化につなげることができれば、双方の良さにつながるのではないかと感じました。

＊　私は今回の講義の印象に残っているのはふるさとを未来につなぐためにと言う言葉である。自身の地元のために自分は何が出来るのか具体的には考えたことがなかったので、これから考えていき、地元に帰る際には多くの知識を身に付けて帰り、少しでも地元に貢献出来る人になりたいと考える。

＊　農村があることと、都市があることは、互いに活かし合っている、という先生の言葉がとても印象的でした。私の小学校も廃校になり、さら地になってしまい、寂しい思いをしたので、この学校のように新しい形で活用される学校が増えると、地域の人の笑顔が増えるのではないかと思いました。子どもたちと一緒に思いっ切りあそび、ぶつかり、子どもの心が動く瞬間に立ち会える学生ボランティアは、人生においてかけがえのない財産になるのだろうなと感じました。

＊　ボランティアをする、という実際のところについて知ることができて良かった。ボランティアをすることで本人だけではなく、参加している他者やその地域にとっても良い影響があるのだと分かった。無償で他者との時間を共有することで、人を知り、自分を見つめ直し、人への深い思いやりをもつことのできる豊かさを得られるのだと感じた。

3.7 ボランティアの実際（こども食堂）　　ふかわ子ども食堂　代表　渡邊　恭子

子ども食堂を運営されている「ふかわ子ども食堂」代表の渡邊恭子さんに講義していただいた。

最初に、子ども食堂に対するイメージを学生から聴取した後、子ども食堂の全国的な取り組みや広島県の現状（2022年度：105 小学校区に全体で 137 か所設置、充足率約 23%）の説明があり、課題はボランティア確保、官民連携、地域全体での認知、運営代表の負担軽減化であることを知った。

続いて、ふかわ子ども食堂の具体的な取り組みが紹介された。家庭を元気に、こどもたちを笑顔にすることを目的とし 2019 年に開始、フードロス食品の無料提供やお弁当の安価提供、遊びの提供を行っていることが紹介された。中でも、子ども食堂の役割は、子どもだけのためにあるものではなく、子どもを真ん中においた多世代交流を行うみんなの居場所づくりであり地域の成長につながるものであるとの話は、学生のこれまでの子ども食堂に対するイメージが大きく変わった瞬間だった。

今度の取り組みとして、子ども食堂と地域の活動を組みあわせ更に地域との連携を強化するため、地域の方と共同で活動ができる拠点を確保し、誰でも立ち寄れる「ふかわのお茶の間」づくりの企画がスタートしていることが紹介された。さらなる発展の話は学生にとって、ボランティアを行う意義について深く考えるきっかけとなったようだ。

【受講生の感想】

＊ ボランティア活動が子どものためだけではなく、地域の成長につながるものだと知った。自分のできること、好きなことが、他の求めている誰かの力になることが、ボランティアの本質だと思うし、ふかわ子ども食堂さんが様々な人をお招きしているなどの努力されているのを見て、より強くそう感じた。

＊ この授業を受けるまでは「子ども食堂」はごはんを食べるのが難しい子どもがごはんを食べにくる場所だと思っていた。しかし、実際には、ごはんを食べるだけでなく子ども同士で交流したり様々な人と交流ができるということを知りとてもおどろいた。また、ボランティアは人の助けにもなるし、様々なことを行うため経験をつむことができ自分自身の力を高めることができるとても有意義なものだと思った。

＊ 子ども食堂の実際の活動内容を聞くと、想像していたよりも多様な活動が行われていることが分かった。ボランティア自体が、限られた人材、限られた資金で活動するため、できることが限られる中で、最大限の企画や行事をしていて、やろうと行動することが大切だと思った。自主的に動くことで、良い方向へ進んでいくのだと思った。

＊ 子ども食堂と聞いて、共働きの子や貧困の子が行くイメージだったけれど、子どもを中心とした多世代交流の場だということ聞き、驚くのと同時に、とても素敵だなと思いました。子ども間、家族間、親間、地域間など、様々な繋がりをもてる場所、安心できる居場所になっているのだろうなと感じ、温かい気持ちになりました。

＊ 子ども食堂というと子どもがメインで大人は介入できない閉鎖的なイメージがあった。しかし、すべての人が子どもを中心とした輪の中で楽しく交流できるので、とてもあたたかい場所だと思った。子どものしたいことをして、あるがままを受けとめてあげることで新しい居場所にもなるし、誰かと誰かを結びつける出会いの場としての役割を果たしていると感じた。

3.8 ボランティアを考える　　NPO 法人　これからの学びネットワーク 代表理事 河野　宏樹

「放課後児童クラブ コレマナ五日市/駅前」を運営されている「これからの学びネットワーク」代表理事の河野

宏樹さんに講義をしていただいた。

この団体は、様々な世代の人たちが、自ら考え、仲間と協働し、実行に移すことができるような“参加体験型”の学びを主体とした、“人づくり”のプログラムを企画運営されている。

２日間の集中講義の最後に、改めてボランティアは社会でどのようにかかわっているか、ボランティアの報酬は何か、どんな不安があるかをグループで話し合うことで、自分自身の気持ちの整理を行い、ボランティア 10 ヶ条を確認し自分が大切と思うものを３つ挙げた。河野さんは、心地よい自分のできるコンフォートゾーンから一歩踏み出して未知の世界、今までできなかった世界に行くことで自分の中で安心・安全の域が拡大し成長する、そのきっかけがボランティア活動にあると説かれた。

学生がボランティアを行う前に自分の不安と向き合い、お互いに確認しあう、一歩踏み出すための貴重な時間となった。

【受講生の感想】

＊ ボランティアをするにあたって、自分が参加者に対して、何を配慮するべきかについて学ぶことができた。不安や悩みを出すことで、自分が回避しないといけない問題が出てきたし、逆に、楽しさや、やりがいを出すことで、自分にない新しい発見や魅力を探すことができた。これらを通して、自分にあったボランティア活動を見つけて参加したいと感じた。

＊ ボランティアの原則や守るべき 10 か条などについて知り、実際に体験する前にとても勉強になった。自分本位の考えを押しつけないことや、自分と他者で考え方の違いを知ることなど、ボランティアをしていくなかで自分自身の視野や考えをアップデートしていけるのもボランティアの良さだと思った。不安や悩みもあるけれど、良い経験になるように努力していきたい。

＊ ボランティアはあくまで誰かを助けるための行動だから、自分のことだけに突っ走らず、いつも相手の立場に立って考えることが大事だと分かった。ボランティア 10 か条は、当たり前のことが書かれているように思えるが、意外と難しいものもあったりするので、もう一度自分で考え直して実際のボランティア活動に取り組みたいと思う。

＊ ボランティア活動をこれからしていくにあたって、重要であることをボランティア 10 か条や話、グループでの話し合いをベースに考えた。相手のことを考えることがボランティア活動をすることにおいて重要であるのではないかと考えた。相手のことを考えることが秘密を守ることにつながり、私的利益を求めることなく、主体的になり過ぎるのを防ぎ無理することも防げる、結果的に、相手のことを考えるということがこの 10 か条につながるのだと理解した。

４．受講生のレポート課題から

ボランティア実習の終了後に提出されたレポート 4 件を紹介する（内容の把握しやすさのために事務局側で、文中のフレーズを使ってタイトルを付け、印象的な部分に下線を付した）。

これらのレポートからは、受講生一人ひとりが、初めての実習先で戸惑いながらも、子供たちと真剣に向き合い成長していく姿が伝わってくる。この講義を開催して良かったと思える瞬間である。

なお、受講生の新鮮な感性を尊重するために、長文の場合も抜粋や省略等せず、全て原文をそのまま転載した。

① 「ボランティア活動で得た発見や学びは自分自身を成長させる糧」

実習先：「小学生以下の子どもたちと交流」（西地域交流センター）、

障がいのある子や学校にいきたくない子どもたちとの交流（NPO 法人　ひゅーるぽん）

広島文教大学　教育学部　２年　　K さん

集中講義やボランティアの活動を通して、私は自主的に行動することの重要性や無償だからこそ得られる体験価値があることを学んだ。ボランティア実習先を見つけて連絡のやり取りをしたり、実際にボランティアに行くためのメールのやり取りなど、自分から行動を起こさなければ何も始まらないということを改めて痛感した。しかし、ボランティアを探すにあたり、自分の周りには多くの情報が溢れていて、自分から何かを始めようと行動すれば、周囲の人は快くサポートしてくれるのだということを知ることもできた。そして実際にボランティアへ行ってみると、無償であり、無給だからこそ得られるもの、自分から得ようとするものに価値があるのだと実感した。限りある自分の時間や労力を対価として差し出して、ボランティアとして活動していくなかで子どもたちとの関わりに楽しさを見つけたり、子どもの姿に驚きや学びを発見したり、とても有意義な時間を得ることができた。大なり小なり発達に凹凸がある子や障害のある子どもたちと過ごすなかで、何度も施設へ通うことで自分の名前を覚えて呼んでくれることの嬉しさ、一緒に遊んでいるなかで楽しそうに笑ってくれることの幸せ、そしてまだまだ教員を目指す者としての自分の未熟さなど、さまざまなことを再発見することができた。子どもたちの見ている世界に触れて、相手の立場から物事を見ることの難しさや、子どもたちの純粋さ、素直さ、残酷さを知り、漠然と子どもたちと関わる仕事に就きたいと思っていた自分の考えと真剣に向き合うという面でも、とても貴重な体験になったと思う。子どもたちだけではなく、その保護者の方や地域の方、そして職員の方との交流を通して、子どもを取り巻く環境の素晴らしさや温かみを実感した。ボランティア期間中に地域の方も訪れる施設の夏祭りが開催され、私も準備や片付け等を手伝ったが、想像以上に来場者が多くとても衝撃を受けた。そして施設に通う子どもたちの保護者の方々が積極的に手伝いや片付けに参加されている姿にも驚いた。地域全体で障がいのある子も無い子も平等に、子どもを見守り育てる姿にとても温かみを感じた。

私は今、中学校の国語科教員を目指しており、必然的に学校での教育活動という部分を注視して考えてしまう。教員のあるべき姿や子どもたちにどんな授業を展開すれば力が身につくかなど、やはりそのような部分ばかり講義でも触れることが多くなる。しかし今回のボランティア活動を通して、学校現場以外での子どもたちの姿を見たことで、更に広い視野で子どもたちにとって必要な支援や教育について深く考えるきっかけになったし、学校にこだわらない子どもたちの第三の居場所について教員志望の立場から捉え直すことができたように思う。以上を踏まえて、私はこれからも定期的にボランティアをし続けたいと思うし、やはり誰かのため何かのために行動することが好きだと思った。これからは**ボランティア活動で得た発見や学びを、大学での勉強に活かし、自分自身を成長させるために活用していきたい**と感じた。

② 「人と人とが繋がることの良さは、その繋がりから生まれる化学反応」

実習先：「海賊キャンプ」（NPO 法人　晴れ時々アドベンチャー）

広島文教大学　教育学部　３年　　F さん

今回集中講義及びボランティア活動を通して、人と人の繋がりやその良さを感じた。ボランティア活動をすることは、活動の先には必ず人と人の関わりがあって、誰かのためにしていることが巡り巡って自分の中の想いや考え、成長に繋がっていると感じた。自分一人の力ではどうにもならないことや、自分だけならできないことしないことができたり起こったりして、**人と人とが繋がることの良さは、その繋がりから生まれる化学反応**だと感じた。

今回私は、子どもたちが参加する 4 泊 5 日の

海のキャンプで、活動や食事などを運営する本部スタッフとしてボランティアに参加した。今までもキャンプに参加したことがあるが、海のキャンプには初めて参加した。いつものキャンプよりも自由でのびのびとした様子が子どもたちに見られた。

キャンプを通して、子ども同士、子どもとスタッフそれぞれの色々な関係が見られた。最初は、班につくリーダーに子どもが話しかけることが多く子ども同士の関わりが少ない印象だったが、班での活動をしていく中で子ども同士の会話も増えてきた。その中には、私たちの知らない子どもたちのコミュニティーも見られた。最初はリーダーを通してだった会話が、わからないところを班の子に聞いたり、逆に教えてあげたりとコミュニケーションをとる中で子ども同士だけで会話が成り立つようになってきた。年齢がバラバラなこともあり、年下の子は上のお兄さんお姉さんを頼ったり、年上の子は頼られることに嬉しそうな様子が見られたりして、子どもたちの中での関係性が見られた。また、リーダーと子どもの関わりの様子を見ていると、子どもたちが班を居場所にできるように接している場面を多く見た。子どもたちも全員がすぐに打ち解けられるわけではないし、自分を出せるわけではない。リーダーが一人の子と班を繋ぐために少しアシストをすると、いつの間にか班の一員になっている。すべてを子どもに委ねるわけではなく、かといってすべてをリーダーが操作するわけでもなく、難しい部分だけサポートをしてきっかけを与えるという接し方をしていた。キャンプでは班の中だけでも様々な人と人の繋がりがあると感じた。

そして、自由な雰囲気だからこそ、楽しいキャンプ中にも衝突が起こった班もあった。毎日の炊飯活動や、海の活動の準備のために動いている人がいる中で、班の中でなにもしていないと言われている子がいた(以下 A くんとする)。当然、他の子の不満も溜まってくるため、A くんに対してあたりが強かったり冷たくなったりしていた。リーダーがその様子を見て、みんなが一生懸命準備していることと、班のためにできることがあることを A くんに伝えた。そのあとから、A くんは前よりも班を意識して行動したり、準備をする班の子を見てみんなの場所に戻ってくるようになったり、変化が見られた。そんな時、A くんが食器干しのチャックを開けた時壊れてしまった。A くんは、みんなのために食器を片付けようとしていたところ、おそらく劣化によりたまたま A くんが開けた時に壊れてしまった。しかし、班の子を見ていると、なにもしない印象の A くんが余計なことをして壊したと捉えているように見えた。実際、本部のところに謝りに来たのは 8 人中 4 人だった。本部から借りている班の物品だから班全員で来るべきではないか、班で起こったことなのにどこか他人事で A くんに冷たいのではないかという話をした。壊した A くんが悪いのかと聞いたら、それは違う、たまたま壊れただけで、A くんは悪くないという言葉が子どもたちから出た。このあとから、同じ班の仲間として A くんのことも受け入れ、A くんもみんなのために動く様子が見られた。

どんな出来事も班ができていくのにつながる。結果よければすべてよしという言葉があるように、どんなにマイナスに見える出来事も衝突も失敗にするのではなく、そこをきっかけにいい方向に向かう気持ちが必要だと感じた。どの班も起きた出来事や班の雰囲気は違えど、その一つ一つが班を作るきっかけであり、結果的にその班ができるために必要な過程だと感じた。人と人が繋がることは、その人との関係の中でしか生まれないものやそこで初めて見つける自分がいて、その繋がりが生きていく上で、生きがいを見つける上で重要になってくると感じた。

これから身の回りで起こったことを悲観せず、どうしたらいい方向に繋がるのかを考え、今よりももっと誰かとの関わりを大切にして、繋がることから新しい何かを見つけていきたいと思った。そう生きることが楽しいに繋がると感じた。

③ 「ボランティア活動だからこそできることを精一杯やろう」

実習先：「学童保育 kusunoki を利用する小学生の見守り」（株式会社くうねあ）

広島文教大学　人間科学部　２年　Ｏさん

私ははじめ、この活動を授業の一環であり、ボランティア活動だと認識して取り組んでいました。授業だから受けるというような考え方です。今までボランティア活動をした事がありましたが、それもほとんどが授業の一環であるようなものでした。今回は今までと違い、すぐにボランティア活動をするのではなく、集中講義でたくさんの方から様々な活動内容を知ることが出来ました。そこで知ることが出来たのは、活動内容だけでなく、活動をすることによって得られる社会的スキルや知識、社会経験談でした。活動をすることによって何を得られ、今何をしているのか、実際に行った方々からの意見は貴重で、また実際に聞くことによって頭に入りやすく、興味も湧きました。それから活動先を探すことになりましたが、これらの話をもとに、自分たちがどのような経験をしたいのか、どのようなスキルを身につけたいのか等をふまえて場所を探しました。選んだ場所では、会社側の方々とお話をすることが出来ました。どのようなことを普段しておられるのか、ボランティア活動についてどのような考え方をしているのか、どのように取り組んでいるのか、様々なことを聞くことが出来ました。子供のことを話す時の代表者さんのお顔はとても優しく、本当に子供のことが好きなんだなと感じられました。代表者さんだけでなく、保護者の方とお話をすこしすることができ、どれだけ子供という存在が大切なのか、改めて感じることが出来ました。そんな保護者の方にとって大切なお子様と関わらさせて貰うことが出来るということがどれだけ貴重な事なのか、考え、これからのボランティア活動での動き方を認識させられました。実際にボランティア活動をしてみると、子供たちは私たちの緊張とは裏腹に、純粋な興味からたくさん話しかけてくれました。一人一人にどのように接したら良いのか、最初は分かりませんでしたが、事前に習ったことや、教えていただいたことをもとに少しづつでしたが触れ合うことが出来ました。一人一人の名前を覚えることがどれだけ難しいか、一人一人の行動を管理することがどれだけ難しいか、など、子供として触れ合うのではなく、個人で触れ合うことによっての大変さを学びました。少しでも目を離すと私たちが想像もしなかったような行動をしているから、ずっと見守っている保護者さんはもっと大変なんだと感じられました。子供だけでなく、同じ場所で子供を見守る仕事をしておられる方とお話をする時間もあり、その方からもたくさんお話をすることが出来ました。ボランティア活動だから適当でいい、という訳でなく？**ボランティア活動だからこそ出来ることを精一杯やろう、という考えで今回行動をすることが出来た**のではと思います。今回は授業でこのような活動をさせてもらうことが出来ました。ボランティア先を探す時に、今回の場所ではなく、他にもたくさんのボランティア活動を募集していたから、他にも参加してみようかなと思いました。このような貴重な体験をできて本当に良かったです。ありがとうございました。

④「よく見る、よく聞く、先入感を払拭することの大切さ」

実習先：「ホップステップキャンプ」（トムソーヤーの冒険隊）

広島文教大学　教育学部　２年　Ｋさん

私は今回の地域と社会の講義とその後に行ったボランティア活動からたくさんの経験と体験をすることができた。集中講義では、様々なジャンルの専門の知識を持つ講師の方々が来てくださり、興味深い授業を行ってくれた。学校活動や体調不良などで、８回の授業中４回しか授業を受けることができなかったが、その４回をしっかり自分の力に出来るようにと真剣に授業に対して取り組むことができた。印象に残っているのは、授業の始めや授業中、授業終わりにも言っていた、わからないことを聞く事は恥ずかしいことではないという言葉、ボランティアをするときは、単位のためにボランティアをしに来たと言う態度では、絶対にいけない、自分の知識や経験を増やすため、自身の成長のためにボランティアをさせてもらいに来たと言う心構えで受けなければいけないと言う言葉である。それを忘れないようにして、ボランティアに取り組もうと考えた。

私が行ったボランティアは８月 11 から８月 17 日までの６泊７日の１週間に及ぶ長期キャンプだった。アルバイトや学校の用事で仕方なく途中で抜けたりすることがあり、初めから最後まで全日参加することができなかったのがとても残念だった。ボランティア初日、初めて、子供たちと顔合わせをするときに、周りの先輩たちの子供とのコミュニケーションの高さに驚いた。ボランティアキャンプに参加するのは今回が初めてではなかった

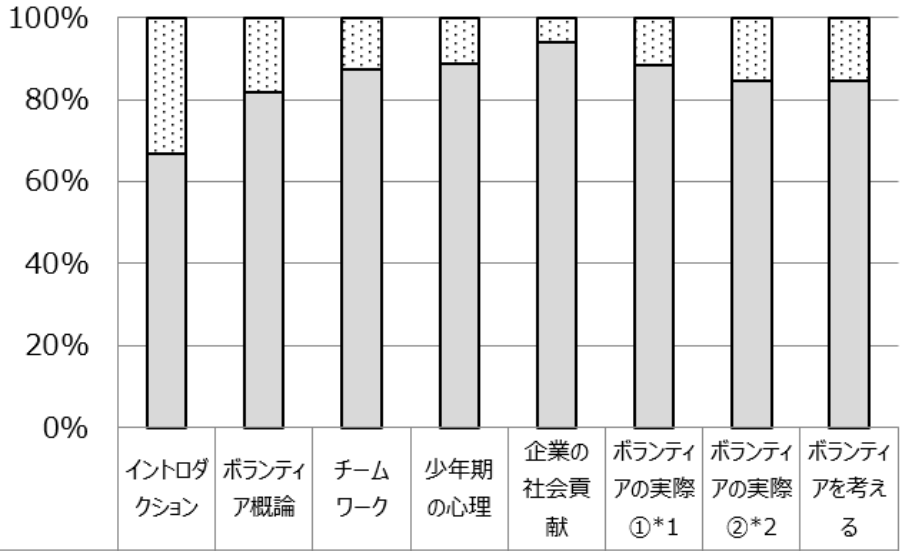
が、それでも何度見ても自分と周りの先輩方との経験の差からくる実力に頭が上がらなくなった。わからないこともたくさんあり、キャンプに慣れている子供が違うことをしてしまっている私にそうじゃないと注意してくることもあった。長期キャンプが初めてで、何が何やらわからないのは、はじめのうちならみんな仕方ないことなのかもしれないが、それでも私は何もできない自分が恥ずかしくてたまらなかった。何より、子供たちに、この人は何もできない人だと認識されることがとても強かった。そのため裏で時間ができると、それまでわからなかったことを先輩に一気に聞くようにしていた。わからないことを聞く事を恥ずかしいとはもともと思ってはいなかったが、講義で実際に先生から念をおされるように言われるとわからないことを聞くことが本当に恥ずかしいことでは無いのだと、真に認識させてくれた。ボランティア初日の夜、一人一人今回のキャンプでの目標を発表することになり私は、子供たちにあなたたちをしっかり見ているし、聞いていると言うことを認識させるために、ささいなことでもいいから反応してあげる、褒めてあげると言うことを意識して、キャンプの活動を行うことを目標にした。結果的に、その目標を実行することができたかは、他の人から見たらどうかわからないが、自分ではよく見るよく聞くよく反応する、これらを意識して活動が行えたと思う。視野を広げてみてみると、いろいろなタイプの子供たちを観察することができた。その分、性格によっては、苦手意識の先入観を持ったまま接してしまうこともあったが、話してみると、個性が尖っているだけで良いところもちゃんとあることがわかった。小学生や中学生、高校生でも自分をしっかりと見ていてくれていると言う事は嬉しいことだ。これから先私は、**よく見るよく聞くことを忘れない、先入観だけで、子供を判断するのではなく、悪い部分も見つつも、それで隠れてしまっている良い部分も見ていこう**と考える。

５．参考

（参考１）理解度・内容について

集中講義の際に、各講義に対する感想と、理解度・内容について、受講生にアンケートを実施しました。

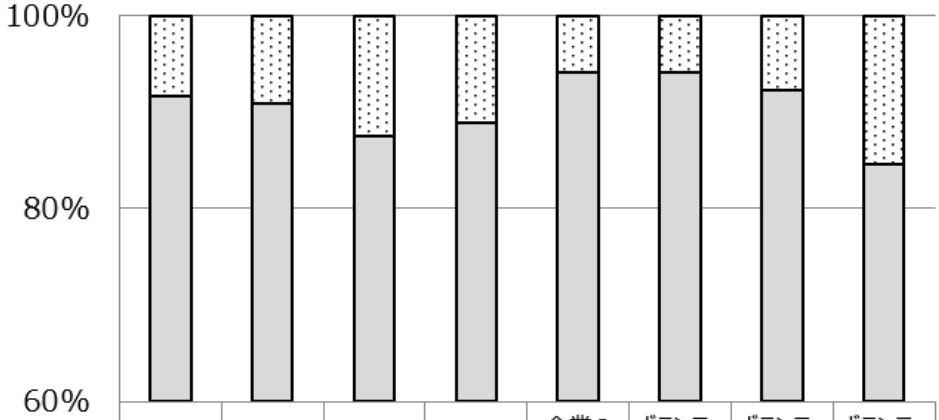
【理解度】



	イントロダクション	ボランティア概論	チームワーク	少年期の心理	企業の社会貢献	ボランティアの実際①*1	ボランティアの実際②*2	ボランティアを考える
■難解	0	0	0	0	0	0	0	0
□普通	4	2	1	1	1	2	2	2
□良く解った	8	9	7	8	16	15	11	11

＊１自然とのふれあい　＊２子ども食堂

【内容】



	イントロダクション	ボランティア概論	チームワーク	少年期の心理	企業の社会貢献	ボランティアの実際①*1	ボランティアの実際②*2	ボランティアを考える
■悪い	0	0	0	0	0	0	0	0
□普通	1	1	1	1	1	1	1	2
□良い	11	10	7	8	16	16	12	11

＊１自然とのふれあい　＊２子ども食堂

(参考２) ボランティア実習先、実習内容について

ボランティア実習は、通常通り「小・中学生とのふれあいのあるボランティア活動」を基本としました。

海釣り探検隊キャンプ・海賊キャンプ・森のカヌーキャンプ（NPO 法人　晴れ時々アドベンチャー）（7 名）
ほっぷすてっぷキャンプ・森のようちえんサマーピクニック（トム・ソーヤー冒険隊）（2 名）
小学校の見守り（株式会社くうねあ）（2 名）
その他、「感動塾・みちくさ」（公益財団法人広島市文化財団　公益財団法人マツダ財団）、
子ども SDGs カンパニー（愛媛大学）、夏休みみんなで宿題！ときどき遊び！（にほんご町内会）、
（広島市教育委員会）（広島市立小学校）（広島市市民局）（NPO 法人ひゅーるぽん）、
（ほしはら山のがっこう）（「もとまち自遊ひろば」の会）（安佐北区ボランティアセンター）　各１名

さいごに

2020 年初より発生した新型コロナウィルスも落ち着き、久しぶりに特段制限のない中で、対面授業やボランティア実習に取り組むことができました。講師の皆様には、集中講義からボランティア実習の相談・受け入れに至るまで、調整とご指導をいただき誠にありがとうございました。お蔭様で無事終了することができました。

広島文教大学でご担当いただき植田副学長や学生サポート課の西沖様には、学生の立場に立った柔軟なご支援を賜り誠にありがとうございました。

以上

発行：2023 年 10 月
公益財団法人マツダ財団
広島県安芸郡府中町新地 3-1
事務局長代理　　本郷　佳加